

令和7年度 研究・研修全体計画

印西市立牧の原小学校

研究概要

1 研究主題の設定

(1) 学校教育目標

心豊かで、心身ともにたくましい子どもの育成 -愛・希望・勇気を育む-

(2) 本校の現状

- 地域・学校ともに誕生（開発）から現在まで10年あまり *平成27年度開校 創立10周年
- 住民は多くは子育て世代で、本校の卒業生・在校生・入学予定の児童がいる家庭
- 児童数 1年目=61人、5年目=355人、10年目=1,033人
- 学級数 1年目=6学級、5年目=15学級、10年目=36学級
- 普通教室数 1年目=18教室、8年目=29教室、10年目=45教室 *二度の教室棟増築
- 職員数 1年目=14人、5年目=31人、10年目=72人
- 教室棟や学童クラブの増築による校庭面積の減少

(3) 児童の実態

- 経済的に安定した家庭で育つ児童が多い。
- 学力の調査では、国や県の平均を上回っている。
- 教師の指導に従順である。イレギュラーな事態に対する柔軟な対応力に課題あり。

【参考】研究教科・領域

算数・外国語（H27-30）、国語・算数・外国語（R1）
道徳（R2-4）、道徳・体育（R5）体育（R6）

(4) 教員の研修の実態

- 人数が多くなり、全員が授業を公開するのが難しい。
- 1教科だけの研究だと当事者のみに負担がかかる。
- 指導案をしっかりと書くことができていない。

(5) 本校の研究主題

主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業作り

～協働的な学びと個別最適な学びの一体的な充実に向けて～

2 研究目的

本研究は、「協働的な学びと個別最適な学びの一体的な充実」の視点で、授業作りについて各教科で検討することで「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた更なる授業改善をすることをねらいとする。

3 研究仮説およびその手立て

「協働的な学びと個別最適な学びの一体的な充実」の視点で、学習活動や教師の支援、ICTの効果的な活用等を検討し、授業改善に取り組むことで、各教科における「主体的・対話的で深い学び」の実現と、児童の資質・能力の確実な育成をすることができるだろう。

○3年計画

1年目	2年目	3年目
協働的な学び	個別最適な学び	一体的な充実

【仮説1】

児童の発達段階や実態に応じた課題を適用し、学びの見通しをもたせれば、学習内容の理解が進み、わかる喜びを味わうことができるだろう。

⇒【手立て】教科ごとに

- ① 導入時—
- ② 展開時—
- ③ まとめ時—

【仮説2】

児童の学びを促進する発問や働きかけ、教具の活用を図れば、学習活動が活発化し、協働的な学びをすることができるだろう。

⇒【手立て】教科ごとに

- ① 発問・働きかけ—
- ② 教具—
- ③ ICT 使用時—

4 個別最適な学びと協働的な学びについて、文部科学省は次のようにまとめている。

協働的な学び

・探求的な学習や体験活動などを通じ、子ども同士で、あるいは地域の方々をはじめ多様な他者と協働しながら、あらゆる他者を価値のある存在として尊重し、様々な社会的な変化を乗り越え、持続可能な社会の創り手となることができるよう、必要な資質・能力を育成する「協働的な学び」を充実することも重要である。

個別最適な学び

・全ての子どもに基礎的・基本的な知識・技能を確実に習得させ、思考力・判断力・表現力等や自ら学習を調整しながら粘り強く学習に取り組む態度等を育成するためには教師が支援の必要な子どもにより重点的な指導を行うことなどで効果的な指導を実現することや子ども一人一人の特性や学習進度、学習到達度等に応じ、指導方法・教材や学習時間等の柔軟な提供・設定を行うことなど「指導の個別化」が必要である。

基礎的・基本的な知識・技能等や言語能力、情報活用能力、問題発見、解決能力等の学習の基盤となる資質・能力等を土台として、幼児期からの様々な場を通しての体験活動から得た子どもの興味・関心・キャリア形成の方向性等に応じ、探求において課題の設定、情報の収集、整理・分析・まとめ・表現を行う等、教師が子ども一人一人に応じた学習活動や学習課題に取り組む機会を提供することで、子ども自身が学習が最適となるよう調整する「学習の個性化」も必要である。

一体的な充実

・実際の学校における授業作りに当たっては「個別最適な学び」と「協働的な学び」の要素が組み合わさって実現されていくことが多いと考えられる。例えば授業の中で「個別最適な学び」の成果を、「協働的な学び」に生かし、更にその成果を「個別最適な学び」に還元するなど、「個別最適な学び」と「協働的な学び」を一体的に充実していくことが大切である。

5 研究組織

研究推進委員会 ○研究主任 研究副主任：2 各学年研究推進委員（1）

6 研究方法

○5教科で行う。自分で選択する。

→教科担任制の推奨により、1つの教科にできない。

① 国語	② 算数	③ 生活理科社会	④ 道徳	⑤ 体育
⑥ 特支	⑦ 専科			

○校内研究会 年3回

			第1グループ 6月?	第2グループ 10月?	第3グループ 1月?
下 学 年 5 時 間 目	1年	7人	国語 生活	道徳 体育 算数	算数 国語
	2年	6人	算数 体育	国語 算数	道徳 生活
	3年	6人	道徳	算数 理科	国語 体育
上 学 年 6 時 間 目	4年	5人	道徳	算数 理科	国語 体育
	5年	4人	算数 体育	国語	道徳
	6年	5人	国語 社会	道徳 体育	算数
	特支	4 3	ひまわり コスモス	ひまわり コスモス	ひまわり コスモス
	専科	2			音楽 音楽

講師の先生(案)	体育・国語・道徳	体育・算数・理科社会生活・	体育・音楽・特支
----------	----------	---------------	----------

○スプレッドシートに記入

	国語	算数	生活理科社会	道徳	体育
1年(7)					
2年(6)					
3年(6)					
4年(5)					
5年(4)					
6年(5)					

	第1グループ	第2グループ	第3グループ
特支 ひまわり(4) コスモス(3)			
専科(音楽・理科・図工)			

7 研修について

○若年層研修 経験5年目までの教員

*リーダー：5年目の教員 副リーダー：4年目の教員

・内容、年間計画等については、若年層が主体的に考えられるようにする。

○その他の研修

救命救急研修（6月）・人権教育・学級経営・

8 研究・研修日程

研究計画

1	4月	今年度の研究について 担当教科決め
2	5月	指導案検討1回目(学年)
		救急救命講習会
3	6月	指導案検討2回目(教科)
4	7月	研究授業1回目
5	8月	指導案検討1回目(学年)
6	9月	指導案検討2回目(教科)
7	10月	研究授業2回目
8	11月	指導案検討1回目(学年)
9	12月	指導案検討2回目(教科)
10	1月	研究授業3回目
11	2月	各教科振り返り
12	3月	次年度の研究について

○指導案検討の行い方

- ① 学年で指導案検討 1回目
- ② 教科ごとに集まる。2回目
- ③ 実践 ー参観者カード
- ④ ふりかえり 学年会

⑤ 2月に全体でフィードバック(各教科ごとに)

○指導案内容(必ず入れること)

- ・单元名
- ・児童の実態
- ・指導観
- ・本時の展開
- ・板書計画
- ・見てほしい、意見がほしいポイント参観者カード(例) ロイロノート

A 授業者が見てほしいポイント

例)発問への子どもの反応、展開での発問でのゆさぶり

B 参観者からの意見

各教科で決めること

国語科

研究主題

主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業作り
～協働的な学びと個別最適な学びの一体的な充実に向けて～

【仮説1】

児童の発達段階や実態に応じた課題を適用し、学びの見通しをもたせれば、学習内容の理解が進み、わかる喜びを味わうことができるだろう。

⇒【手立て】教科ごとに

- ① 導入時
- ② 展開時
- ③ まとめ時

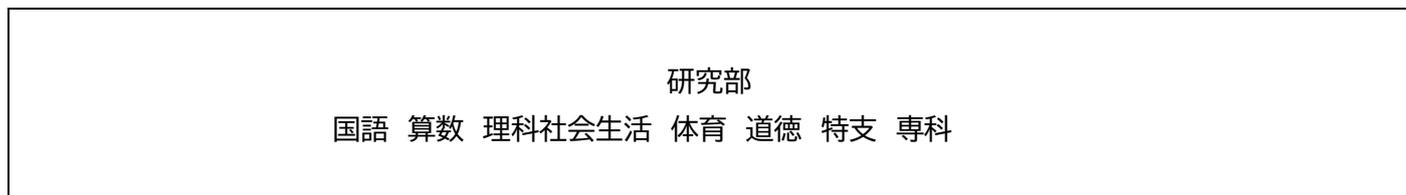
【仮説2】

児童の学びを促進する発問や働きかけ、教具の活用を図れば、学習活動が活発化し、わかる喜びを味わうことができるだろう。

⇒【手立て】教科ごとに

- ① 発問・働きかけ
- ② 教具
- ③ ICT 使用時

組織図



9 校内委員会(研究推進委員会)

- ・授業に関するアイデア 各教科 学習ネタの供給の仕方。
- ・学力テストの結果から分析

4 研究主題

5 授業アイデア 研究主任

6 授業アイデア 1・2年

7 授業アイデア 3・4年

9 学力テストの分析(国語)

10 学力テストの分析(算数)

11 授業アイデア 5・6年

12 授業アイデア

1 授業アイデア

23 次年度の研究テーマ

10 リーディングDXについて・・・本校も今年度対象です。

GIGA 端末の標準仕様に含まれている汎用的なソフトウェアとクラウド環境を十全に活用し、児童生徒の情報活用能力の育成を図りつつ、個別最適な学びと協働的な学びの一体的な充実や校務DXを行い、全国に好事例を展開するための事業です。

「個別最適な学び」と「協働的な学び」の一体的な充実を通して、主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業改善につなげる、しかも、働き方改革と両立させる形で。そうした挑戦に不可欠なインフラとして1人1台のGIGA端末が整備されました。

全国各地では意欲的な取組が次々と生まれつつある一方で、端末を日常的に活用している学校とそうでない学校との間で大きな差が生じているのも事実です。

こうした中、生成AIの飛躍的進歩に代表される社会のデジタル化はこれまで以上に加速しており、教育の在り方にも大きな影響を及ぼすことが見込まれています。新たな教育課程を構想するためにも、また学校を若者に魅力ある職場にするためにも、一刻も早く端末活用の日常化を進め、教育DXを実現することが必要です。

こうした問題意識の下、本事業では、全国すべての都道府県及び政令指定都市に指定校をおき、GIGA端末の標準仕様に含まれている汎用的なソフトウェアとクラウド環境を徹底的に活用し、情報活用能力の育成を図りつつ、「個別最適な学び」と「協働的な学び」の一体的な充実や校務DXを推進し、全国に好事例を展開することとしました。

ビジネスパーソンが活用しているソフトウェアを子供たちも同じように使う。大人と同じようにクラウド環境

を使いこなし、クラスメートを含む様々なリソースを参照し、学習を自己調整しながら、問題を発見・解決する能力を磨く。端末とオンライン、様々なデジタル教材のサポートも得ながらオーセンティックな学びを増やし、社会に開かれた教育課程を実現する。先生方も社会で使われている便利なツールはどんどん使い倒して、生まれた余裕を子供たちのために使う。

そんなチャレンジに向け、全国の指定校や教育委員会の皆様と想いを共有し、課題を受け止めて一つ一つ解決しながら、取組を進めていきたいと思えます。どうぞよろしくお願い申し上げます。